

私と研究所

福島 康記

1. 研究者を目指した頃

私は1954年東大農学部林学科を卒業し、1年農業経済学科の選科生をした後大学院林業学専修過程に進んだ。その55年に、大学・試験場の林政中堅研究者を中心に、若手官僚、産業界の人達が集まって林業経済研究会が発足している。創立時の会員総数28名、大学同期で、設立されたばかりの農林漁業金融公庫に勤務する森星之介君と後に立正大学経済学部長を務めた福岡克也君とともに最年少の会員となった。当時は戦後復興期、深刻な木材不足が続いて、大学の造林学の講義では早晚日本の山は裸になってしまうだろうと聞かされた。当時公刊された「林業地代論」など石渡貞雄氏の著書に引かれ、林野所有に対する関心に加えて、新しい学問分野と思われた林業経済論にも興味を寄せた。

その頃、四谷にあった林業経済研究所に何回か行った。理事長の早尾丑麿氏が居て、官庁の技官軽視の構造を何度も聞かされた。それで大学柔道部で一緒だった法律・経済の連中の後塵を拝するのは御免だと考えたのも、この道に入る一つのきっかけになった。

林業経済研究会創立当初は私達学生が勉強のためと言われ、ちょいちょい報告を課せられた。経済学や歴史学の本を読んで林業に当て嵌めて、それらしい報告をした。大学・試験場研究者、若手官僚、レッド・パーズに遭った元官僚、産業界の人達が、信奉する経済学も様々だったが、お互いに切磋琢磨し新しい林業経済学を創るのだと意欲を共有し、和気藹々のうちに議論をした。

その当時の、言い方は悪いがごった煮のような林業経済研究会に比べると、林業経済研究所は月刊誌「林業経済」を発行し、より広い範囲の官・産・学・試験場の人達の現場の報告と主張の場として実績を積み重ね、確固たる基盤を持っていた印象だった。そんな状況のなかで育っていった林業経済研究者が、

高野了乙氏のような名編集者も得て、「林業経済」誌掲載に向け論文を書き、それが業績として評価され、雑誌が学会誌の役割を果たす時代が続いた。戦後第1世代も長く健筆を振るった。

私は、東京在住時は林業経済研究会とは常に密接な関わりを持ち、幹事、代表幹事を何回も務めた。大学助手の時に代表幹事をやらされた時は、林政総合調査研究所研究員で後に立命館大学経済学部長になった奥地正氏と二人で会務をほとんどやった。その時に、秋季中集会の出席率を高めようと個別報告を始めた。今は学会の規模も守備範囲も比較にならないくらい拡大したが、はじめ東京在住の若者が全く自由な雰囲気の中で、手作りで研究会運営をやり、徐々に組織を固めていったような感想を私は持っている。

一方の林業経済研究所だが、片山茂樹氏が57年東京農農業大学に転出して入れ違いに入所した30歳前の高野さんがすぐ編集後記を書いている。思うに「林業経済」もやはり、創立以来の理事さん達の所運営の実績に積み重ね、戦後の開放的な空気の中で若者が自由に発想し、「林業経済」誌をリニューアルしていったのではないか。その翌年には鷺尾良司・安藤嘉友氏が入所している。彼らもその中で育っていったのである。後に研究会は「学会」となり、当時は想像もしなかったような規則づくりの「学会誌」が刊行され、一方の「林業経済」も大学・試験場研究者の業績発表の場の性格を強めたのだが、現状にあき足らず、言わば向こう見ず、あるいは自由闊達に議論を闘わせた、かつての林業経済研究会と「林業経済」誌の気風を懐かしむのは私ばかりではないようだ。

2. 鈴木尚夫氏と坂本一敏氏のこと

私は80年に50歳になって、ほとんど20年離れていた東京に戻った。東京に戻って、前々から懇意にして頂いていた鈴木尚夫氏との関係もあり、林業経済研究所にちょいちょい出掛けた。編集委員となり調査事業委員会にも出席した。鈴木さんは筑波大学の教授をやった時を除いて、ろくな報酬もなく長年所を支えて、研究所そのものような人だった。東京に来た当時研究所は目黒にあって、見学でだったか研究員の菊間満氏（現山形大学）運転の車に乗って、都下の奥多摩に行った。雑誌校正を手伝った記憶もある。私と林業経済研究所

の係わりを書いたこの小文には、所が一番混乱した時期だったが、事実の前後や人との関係で定かでない時期がある。その点お許し頂きたい。

最初にある悔悟を持って報告しなくてはならないのは、坂本一敏氏に林野庁定年退職後研究所の研究員になって欲しいと、私ごとき理事でも何でもない者が一存で口説いて、実際入所されたことである。今考えてみるとどれだけ僭越かつ専横な事だったか。鈴木さんはそれについて一言も言わなかったが、坂本さんの給料を払うのにどれだけ鈴木所長に負担を掛けたか、全く忸怩たるものがある。坂本さんはのちに、研究所に入って良かったと言われたが、それが私にとってせめてもの慰めである。

私は倉沢博編著「日本林業の生産構造」研究会で、鈴木・坂本両氏と一緒に、ずっと懇意にして頂いた。「生産構造」序章の「地域構造」は、鈴木さんの構想を受けて書いたものだ。林野庁は今とは余程事情が違い、「官庁エコノミスト」が何人もいて、積極的に執筆活動をしていた。一般の行政官も割に気軽に筆をとった。私は学生時代もその後も林野庁に出掛け、調査課の萩野・坂本両氏を訪ね、様々な資料・情報を得た。萩野さんには、後に論文を書く際に何人かの人に紹介をして頂くなど、一方ならぬ世話を頂いた。坂本さんは音楽好きで、会うと音楽・LPの事が話題になった。坂本さんは、私に取り兄貴分という存在だった。研究所退職後秩父困民党の研究会に入り史跡を歩いたりしていて、先年夏に亡くなった。文章のうまい人だった。

塩谷理事長はこんな私を見て、研究所の理事にした。その塩谷先生を、研究所の窮状のなかで「ボランティア態勢」を提案し、無給にしてしまった。塩谷先生は、理事長を退かれた後研究所の新年会などで、福島君、私は理事長を11年やったよ、君はまだまだだよ。こう何回か言われた。

もう一つ、研究所に関しての、鈴木さんとの関係の事を述べなくてはならない。塩谷理事長の任期が長期化し、後任が居ない。最有力候補も結局実現せず、鈴木さんは、若い時の経歴の関係だろうが、絶対引き受けられない、私にやれと言う。現役の国立大学教官は副業を禁止されているし、演習林長もやっているし、だいたい無理だ。二人で鳩首思案を続けて、塩谷先生と同窓の関係もあ

り熱心に研究所の運営に係っておられた、元行政官で当時団体役員の大矢寿氏がどうかということになり、手土産を持って家を訪ねたら、「それで学会員はいいのですね」と言われてこの句が継げず、すごすご引き下がった。その帰り道、鈴木さんは私に、東大定年退職後三重大学への赴任を取りやめて、理事長になれと言うのだ。私は大学院設置の要員として既に三重大学併任となっていた。大学を辞めたらやりますよと言ったが、承知しない。三井昭二研究員の就職はどうするのだと言ったら、さすがの鈴木さんも黙った。私は薄給の三井研究員が研究所の編集から庶務の事務までこなしているのを見て、ああこれではもう研究所は無理だ。こんなのはいけない。研究所を閉じるため退職後理事長をやるかと決め、鈴木さんにそう伝えていた。その後、当時東京農業大学教授だった紙野伸二氏が、私が東京に戻ったらすぐ交替する条件で理事長就任を承諾され、皆さん胸を撫でおろした。三井氏は幸運にも三重大学の教員に採用されたが、研究員を失った研究所の無給理事長を私はどうにも引き受けざるを得ない立場となった。

3. 理事長就任

東京に戻り、紙野理事長、小田許久所長のもとで研究所の運営に協力することになった。紙野さんは東京農大の宮林助教授（当時）をはじめとするスタッフに報告書を書かせ、研究所に多額の収入を齎した。私は研究所を閉じるため理事長になったのだが、それが当面難しくなったわけだ。94年6月理事会で理事長に選ばれると、小田所長、相馬昭夫事務局長、農大副手原研二研究員のメンバーで（相馬さん以外は非常勤）仕事を始めた。

当時研究所は雑誌発行を主目的とし、林野庁・外郭団体から調査事業を受託して、所長・研究員に大学・試験場の研究者そして官庁OBも加えて調査事業を実施し、人件費を稼ぐという感覚で運営していた。小田さんは、理事長が替わると3年ほどは林野庁などから調査事業の発注があり運営を続けることができるが、それを過ぎるとまた元に戻って財政難になると言っていた。だが、私が理事長になった時には、もうそんな時期は過ぎていた。調査事業に対する林野庁の僅かな補助金は毎年減額され、次には小額補助金として全国森林組合連

合会受託事業に統合され、そして無くなった。そんな中で、有り難かったのは全国森林組合連合会の田中茂指導部長の配慮だった。森林組合活動の調査事業をセットで回して下さった。調査費が研究所の事業としては潤沢で、私と原研究員が2個所の調査に当たった。

その後も西田尚彦氏、町田盛輝氏、肘黒直次氏と歴代の全森連指導・組織部長に調査事業を発注して頂き、手厚い便宜を頂いた。西田さん、町田さんには労働力確保支援センター勤務になった後も、多大の支援を頂いた。とくに西田さんは編集委員、理事・拡大運営委員会委員とずっと務められ、会計経理の深い造詣と団体運営の長い経験によって、大学関係理事の足りないところを補って頂いている。全森連副会長の岩川尚美氏は、研究関連業務の態勢が合理化で手薄になってしまった。研究所にその役割を担ってもらいたいと言われた。森林組合の組織・事業のあり方・役割をテーマに研究所の受託研究として行い、また全森連と提携する形でSGECの審査機関の登録もし、連携関係を強めてきた。今後も、雑誌編集企画の中で森林組合研究を促すのは当然ながら、森林組合との広い面での係わりは、研究所にとって重要な課題であり続けることになる。

4. 研究所と人と

日常の業務は常勤の事務員が所長の指揮のもとで行ったのだが、月に2回所内会議を開き連絡調整を行った。そして主要理事による常任理事会が、随時重要事項を審議した。96年6月、「機動的」に対応できるメンバーが欲しいと考えて、小田所長、手束平三郎理事ほかベテランに退任頂いて、所長は紙野さん推薦の中村三省氏、理事に林政総研藤沢秀夫氏、東京農工大学岡和夫氏などに交替して頂いた。官庁・団体関連のしきたりに限らず所運営に関して解かりかねる事項が多く、林野庁出身の両理事から多くのアドバイスを頂いた。また林政総研の塩崎専務理事には頻りに電話を掛け、総研に出向きもして、様々教えて頂いた。氏には嫌な顔一つされず対応して頂いて、今でも感謝している。総研事務の女性にもお世話になった。その後官庁OB理事、常任理事会に代わる拡大運営委員会委員を三澤毅氏、真柴孝司氏にお願いし、運営全般につき大いに助けて頂いている。手束さんは理事退任後も新年会など所の懇親会に一升瓶を

持って必ず出席し、我々を励まされた。

手束さんに、やる気である小田さんを何で辞めさせるのかと難詰されたが、小田所長の交替は全くのミス、中村さんは我々同様金勘定が苦手だった。後で三澤さんから所長は金の勘定ができればよいのだと聞かされ、全くその通りと臍を噛んだが後の祭だった。関係書類整備から月ごとの収支計算、官庁対応は小田所長により適切に行われていたのに、それから研究所の迷走が始まったようだ。小さな組織であり事務量はたくさんではないが、1個の団体として処理すべき項目は多く、研究所という団体運営の舵取りは、若い時分研究所に研究員として勤め官庁勤務経験も長い小田さんが担っていたのだ。

この時期の所運営に関して、編集委員長の大嶋顕幸氏に大いに助けて頂いた。大嶋さんは自らの編集方針を貫かれた文字通りの編集者だった。大嶋さんの、原稿依頼の電話でしつこく食い下がっていた姿を今でも思い出す。この時の雑誌は一般には評判が良く、読者も増えた。後に所運営が混乱して、大嶋さんが依頼した原稿の僅かな稿料も払われないことがあった。大嶋さんにも執筆者にも、何とも申し訳ないと思う。

所長として長年支えて下さった田中純一氏は大嶋さんとともに私と同年配、相棒のような存在だった。馬場事件を契機に所から離れることになったが、後述するように、私は田中さんに命を助けられたと思っている。

5. 研究所の運営、とくに中川研究員のこと

紙野さんの斡旋で原さんが山林会に移ることとなり、信州大学野口俊邦氏推薦の中川恒治君を常勤研究員に採用した。当時事務局長として日常事務をしていた相馬昭夫氏に、庶務会計業務の指導も頼んだ。相馬さんが70歳で辞めてからは、中川研究員が編集から庶務会計の業務を全てやった。私はある期間所長も勤め、編集委員会にも出て、中川君とともに事務方を務めた。雑誌の原稿依頼・催促、場合により原稿内容の確認から修正もし、最終校正、査読もやった。長年初校を頼んでいた人が辞めてから負担が増えた。何人かの人に校正を頼んだが断られた。見かねて紙野さんが手伝われ、筒井迪夫氏にも校正をやって頂いたことがある。中川研究員が事務をやっている時には、所の収支は償ってい

たと考えていた。雑誌購読料請求もそうだが、事務処理にもとくに疎漏がなかった。

調査事業受託が少なく困っているなかで、森公弘済会の研究助成金を受けることとなった。私にはやや門違いの「省力造林」とテーマが決まっていた、技術問題は専門家に頼むほかなく、中之条の国有林試験地に専門家と出掛けたりし、手間と費用が掛かったうえ、個人に対する研究助成金で所得税支払いでも不本意な思いをしたのだが、研究所を何とか存続させようと助力を頂いた皆さん、とくに三澤さんのご好意には感謝するばかりである。

鈴木尚夫氏の長年の貢献は言うまでもなく、三井研究員の例と言い、また菊間さんから研究員の時には女性職員が二人居たが、その給料を払うため働き、自分の給料はあまり無かったと聞いたことがある。野口俊邦氏も同じようなことを言っていた。所外では、紙野理事長の「搾取」に甘んじた農大スタッフがいい例で、皆がこうやって研究所を支えてきたのだ。研究所のこういう事情は周知だから、大学・試験場の研究者は、割の合わない仕事も引き受けて下さった。窮余の策だったが、島根大学井口隆史氏と愛媛大学泉英二氏に、調査費の一部として5万円だけ送り、普段自ら現地調査を進めているお二人からかなり長い立派な内容の調査報告書を書いて頂き恐縮した。外国事情調査で比較的潤沢に研究費を手にする研究者がいる一方で、費用捻出に苦労しつつ地道に国内山村の調査を進める人達もいると知り、頭が下がる思いだった。

私が最後にやった調査事業は、「花粉症抑制のための資源管理計画」だった。森林総合研究所メンバーが主体になって行われた総合研究で、筑波大学餅田治之氏が森総研から頼まれたが自分では出来ないのではと研究所に持ってきたものである。何人かの林政・経営関連の大学教授に協力を依頼し委員会を組織し、調査研究の方法など協議して決めた。京都大学岩井吉禰氏にはとくに協力して頂いた。この調査報告書に対して森林総研の研究総括担当者には、研究所の事情だろうがこれだけのメンバーを集めてこんな内容でと不評だった。私は戦前・戦後期にスギが日本の近代化と文化構築にいかに関与したか書いた。その実績の上に効率を求めてスギ造林が進んだのだ。とくに基本法林政の積極策が

国の財政構造の関連もあり大きな問題を残すのだが、研究者だけでは対策を出せない性格の課題だった。根本昌彦研究員（非常勤）のアメリカのブタ草被害・防除の論文の要約も載せた。大学院生二人がアンケート調査を行い、彼らの研究にも裨益した。この研究の報告書は、1報告を除いて有用な報告だと思っている。ともかくこの研究で、ある期間研究所は息を継いだ。

この研究調査事業を進めている時、私の健康状態は最悪であった。腰痛が悪化し、带状疱疹にも罹った。感染症研究所での医療・気象などを含む研究の全分野の中間報告会で私は座ってられず、板の座席に寝転がって報告を聞いた。自分の番になって杖を突いて出ていった。前の座席に環境庁担当課長が座っていて、林野庁、林業経済・経営関係者に対して厳しい発言を繰り返した。

この前後に、もう限界だから理事長を辞任したいと田中さんに申し入れた。自分がやるから療養してくれとの田中さんの言葉を聞いて、私は解放された思いだった。花粉症の報告書の最終纏め（編集・校正・印刷）は、田中さんの指示により中川研究員が担当した。ある期間、私は所の一切を忘れて過ごした。

そんな時期に、田中所長から鹿児島大学大学院博士課程を終わった馬場裕典君を研究員として採用したいと提案があり、私も賛成した。中川君に馬場君の教育を頼んだのだが、この馬場研究員によって中川君はやる気をなくし出所しなくなり、研究所は混乱の極に達した。研究員の教育・訓練が出来ないどころか、私達が研究所にあまり行かずにいたことはやはり論外の事態で、私達にも当然責任があるが、雑誌の発行は遅滞し、事務も混乱を極めることとなった。群馬県上野村黒澤村長の原稿を馬場君が校正をして、滅茶苦茶なものが雑誌に掲載された。それを見て私は所に出たのだろう、村長に電話を掛けて謝り、再度論文に掲載することを約束した。その後、馬場君から中川君退所のこと電話で聞いた。辞職する時には理事長から辞令を手渡して貰いたかったよなお互いに話したそうだ。

私は中川研究員と研究所の運営業務を二人でやった時には、毎日のように研究所に電話して中川君から報告を聞き、指示を与えて、日常運営のお茶を濁していた。旅行中にも電話した。彼に事務処理につき聞かれて様々な人に尋ね調

べたが、答えられなかった事項も多かった。彼を一人で所に置いたことがまず彼を不安にした最初の原因であることは明らかで、慙愧に耐えない。研究所を壊滅させた事より、中川君の事に悔いが残る。彼は、調査当日に多忙を理由に現地に来なかったことがあった。一度報告書原稿を直したらショックを受けたようだ。野口さんは学生の書いたものに手を入れた事がなかったのかと疑ったが、振り返ってみて今は、あのような純真な青年と向き合う機会を与えてくれた野口さんに感謝する気持が強い。

省みると、私の理事長就任以前にも研究所は何回も財政危機に見舞われ、多くの人達はその度に辛酸を嘗める思いで努力し、月刊誌「林業経済」を発行し続けた。私は理事長になって編集担当理事も務めたが、編集委員会が企画した特集物で委員会指名の人に執筆を断われたりで思うような誌面が作れず、雑誌に対する林業経済研究者の意識は少しずつ変わったと思わせる場面が何度かあった。研究所の使命は終わったとの声も聞いた。「研究所四十年のあゆみ」に、増加する「類似の刊行物」との競合の事が書かれているが、そういうものにはばかり書いて満足し、緊張感を欠いてレベルを落としているとも感じた。そんな事もあり、月刊誌「林業経済」は先人より受け継がれてきた貴重な財産であるとの思いを捨てられず、潰す決心がつかなかった。この時の思いは、99年1月の理事長新年挨拶に記した。何よりも林業経済研究者の数は少なく、市場はマイナーである。失ったら再度創るのは不可能だ。農水関連の学術雑誌が廃刊に追い込まれたとのニュースを何回も聞き、研究所（財団）を買おうという電話も何回か聞いた。私は研究所を閉ざすため理事長になったのだが、団体は創るより潰す方が難しい面があることも分かり、愚図愚図やってしまった。研究所を閉ざすと言うなど越権との声もしばしば聞いた。当然だが、私はただ座してそう言ったわけではない。中川研究員に何とか業績を作らせ就職させて身を引こうと考え続けたが、中川君が出所しなくなって私は何も考えられなくなり、完全に引っ込んでしまった。その頃悪性の宿痾も得たようだ。

考えてみれば、研究員の補充ないし後任人事に不運があったが、無給の理事長・所長、1人の研究員という運営体制そのものが無理だった。三井研究員の

姿を見て考えた事は、間違っていなかった。収支の辻褃合わせを優先させたのもよくない。私の不見識から研究員に負担が掛かり、1人の有為の人材を追い込んでしまった。

6. 研究所改革

そんなある時、研究所から理事長は所運営の混乱の責任を取り事態の收拾を図れと電話が掛かってきた。編集委員の鈴木喬氏が、理事長職はみなが選任し付託を受けているのだから、お前は責任があると言うのだ。そう聞いても、私には何の感想も浮かばなかった。

ともかく出てみたら、部屋はまるでごみ溜め、一日掃除を続けやっと座れるようになった。総会を控えて会計報告がまるで出来ていない。慌てて林政総研に居た馬場研究員を呼び出し、夕方出所してきた彼を相手に稟議書と領収書の対照など事務処理を進めた。数日後必要書類を会計事務所に届けて、遠藤所長に至急纏めてくれと頼んだ。田中所長とも資料整備を進めたが、結局書類不備のまま総会に臨む羽目になった。総会では所運営の混乱を謝罪し、建て直す努力をするからご容赦頂きたいと理事・評議員に頭を下げるよりほかなかった。混乱の中で一貫して所を支えたのが編集委員だった。編集委員長の東京大学永田信氏と東京農業大学宮林茂幸氏が所の運営に乗り出し事態の收拾を図ると約束してくれた。永田さんは編集、宮林さんは事務関係の、それぞれ業務まで責任を持って態勢建て直しを図った。私は警察（盗難事件始末）、税務署、会計事務所、銀行、郵便局回りをし、当面処理を迫られている諸手続きをして歩いた。馬場研究員を辞めさせ、宮林さんの研究室の大学院生二人が事務書類の整理をした。現役の大学教授がそれも複数、所の運営に乗り出し、しかも若手の編集委員が積極的にしかも厚くそれを支えた。研究所に取ってはまさに画期的な事態だった。とくに忙しい本務の中で研究所再建のため尽力を惜しまなかった、また今でも努力を続けている若手編集委員諸氏には感謝するばかりである。この前後の経緯は、鈴木喬現所長などにより記されよう。

笠原義人氏が一昨年宇都宮大学定年退職し運営に参加したことが、所運営に厚みと機動性を加えた。永田・宮林両氏は大学行政の要職を歴任しながらの

ハードさで健康が気になるが、お二人のお陰で私の研究所忌避の感情は緩和した。それだけでなく、笠原さんに、理事長をやっているから元気に過ごせるのだと言われたが、ともかく何もしないでいいのだから楽だし、私よりかなり若い、闊達な人達と顔を合わせれば、自ずと元気になる。宿痾はさいわい今のところ自覚的には健康状態に大きな影響がないし、研究所には感謝してよいのだろう。

今年に入り、筑波大学餅田治之氏が所運営に積極的参加をした。餅田さんはずっと研究所を見守っていてくれていて、これまで様々な配慮をされた。競争入札により決められるようになった官庁などの調査事業マーケットに参入し、また科学研究費補助金申請資格も取り、多くの研究者を糾合できる本研究の特色を生かした研究組織として整備し、積極的に研究計画を立て、研究活動の資金基盤を得て、若い研究者の職場ともなり、研究者の退職後の拠点ともしようと提案し、動き始めている。01年以來の新体制も、所の収支構造を変えるものでなく、数年前亡くなった柳幸広氏のご遺族や笠原・餅田両氏の寄付金があって大きなマイナスにならないで済んだのであって、収支のマイナス構造は変らなかった。餅田さんの提案は、懸案として残っていた研究所の財政基盤強化の意味からも時宜を得ている。国有林特別会計の雑誌買い上げに支えられた時代が去り、雑誌発行を目的としてそれを支える調査研究事業を行ってきたのがある時期以降の研究所だったが、テーマを決めてシンポジウムを毎年行い、森林など認証事業にも進出し、今後は広く調査事業の一般マーケットにも参入し、林業、木材流通、木材関連産業、山村問題、山地資源保全・利用、環境問題などにつき広く研究と提案を行う研究所としての基盤を築こうとしている。私は、研究所の財政基盤強化により雑誌の頁数増が可能になり、かつてそうであったように、形式も内容ともに自由な論文・評論公表のスペースを加える日が来ることを期待している。この時代だから今後どう展開するか全く不明だし、編集委員・研究員の若いメンバーの強い支持と意欲が欠かせないが、学会初代・4代会長、森林学会会長、農大学生部長・博物館長という願ってもない顔触れの向こうに、あの世の鈴木尚夫さんのやや下を向いて北叟笑む姿を見たように思った。